

文芸研ニュース

2022年12月25日
—NO. 162—

発行 文芸教育研究協議会
編集 文芸研事務局



皆を束ねる酒井大会事務局長

巻頭	辻委員長より	1
大会の振り返り	(沼澤先生)	4
サークル便り	かごしまより	6
サークル便り	枚方より	8
事務局通信		9
事務局員の妄想日記		11

第56回大会を終えて

委員長 辻恵子

● 充実した内容の二日間

二〇二二年七月三〇・三一日、第56回文芸研大会が昨年度に引き続きオンラインで開催されました。前回は一日でしたが、今回は一日半。

一日目全体会 (基調提案・記念講演「物語るこ

と、伝えること」(朽木祥さん)

二日目入門講座(詩・作文・絵本・文芸学・もの

の見方・考え方・説明文) 6

分科会 (一〜六年、中高、特別支援) 8

という内容でした。

記念講演の講演者、朽木祥さんは、光村図書出版5年の教材「たずねびと」の作者。ご自宅からのオンライン講演という形での実施でしたが、参加者には大変好評でした。物語ることは、「想像力を通して目撃させること」「物語が与える力は、ちがう時間ちがう人生を生きたこと」という表現が私たちのめざす「切実な文芸体験」とぴたり重なりました。また「共感共苦」という重い言葉も深く印象に残っています。

入門講座・分科会では、「絵本」の伊野さん、「ずうっと、ずっと、だいすきだよ」の川口(角)さん、

「大造じいさんとガン」の三浦さんが、初レポーターとしてデビューしました。それぞれ素晴らしい内容の実践報告がなされて、一年間の研鑽と、ここまですべてこられた各サークルの先輩方の存在の大きさを感じさせられました。

また今年度スタートしたばかりの「特別支援分科会」も、向井さんの意欲的な実践報告によって充実したものになりました。何もないところからでした。提案にこぎつけてくださったおかげで、今後「文芸理論や認識論など『文芸研の授業』の特性がよりはつきりと見える報告を」という方向性もみえてきました。

その他すべての入門講座・分科会レポーターの皆さんが、大会を実りあるものにしてくださったことを心よりお礼申し上げます。

運営面では、全国大会実行委員の皆さんが委員長、酒井さんを中心に献身的に活動してくださいました。そのおかげで、トラブルもなく全てにわたってスムーズに進行したことは、何よりも幸いなことでした。見えないところで尽力してくださった皆さん、本当にありがとうございます。大会終了後も会計関係の残務処理を担ってくださった山本さん、岡崎さん、お世話になりました。

●これからの課題

今大会の参加者人数は190名。二日間の充実した内容を思えば、ぜひとも200名を突破したかった、というのが本音です。しかし、その現実を踏まえここから課題を明らかにして、来年度へ新たな一歩を踏み出しましょう。

ここで考えていきたいのは「オンライン参加どまりで、サークル拡大につながらない「お客さん」のような層をどう取り込むか」という問題です。つまり、各地の「国語の教室」などに参加者は増えているのだけれど、オンラインの気軽さで参加する人が多く、なかなかサークル員になって定着してくれないということなのです。

なんとか文芸研の仲間を迎え入れるところまで、手だてを考え、工夫していくことが求められています。例えば、困ったことを持ち寄ってもらうとか、その人のニーズに合った学習を組むとか「国語の教室」を継続する中からよいアイデアが生まれたらいいですね。できることからどんどん取り組んでください。そしてそれを交流していきましょう。

●久々のリアル大会だからこそ

来年度は三年ぶりのリアル開催です。各サークルで山口大会を見据えた活動を始めてください。

久々のリアル大会ですから、オンラインの時とは勝手が違います。参加者にとっても、対面で学ぶこと、とりわけ話し合うことには戸惑いがある、そう考えておいた方がよいかもしれません。レポートが完成したら、さて分科会をどう進めたらよいか、丁寧に検討をしてください。

なお、どの分科会にも司会者・提案者のほかに文芸研の仲間が加わっていて進んで発言してくれると本当に助かります。そのような立場であれば、ぜひ積極的に発言し、話し合いをリードしてください。

● いつの間にかこんな授業になっていた

—実践研レポートと比較してみて

この秋、わたしの勤務校ではこれまでリモートだった教員の相互授業参観が完全復活しました。校内研究、初任者研、二年目研、若年層研：これでもかというぐらい、いろいろありました。（地域によって様々なものがあるようですね）その中には、皆さんがあつと驚くようなものもあつたのではないでしようか。

このところコロナ禍の中、「隣は何をするものぞ」という感じであり授業を見合うような交流がなかったからよけい、見てびっくり！どの教科ですが、国語に関して言えば「もうこれ以上、ざっくり読め

ない」と思っていた物語の読解が、さらに短縮されていてびっくり！「モチモチの木」が3時間で読み終わってしまったのでびっくり！「説明文をさっと読み飛ばした後、どうでもいい活動（タブレットを用いて何かを作る）がグレードアップしてびっくり！作文が、画像だらけで短い言葉を添えただけになっていてびっくり！（さらに、授業を見た後のある研究協議では意見を交流するのに、実際に話し合うのではなくタブレットに書き込んで読み合うのです。その意味がわからない・・・とこれはびっくりを通り越してがっくり！）

あなたの学校はどうでしょう。

教員不足も相まって、授業の変質、質の低下に歯止めがかかりません。いつの間にか、周りにそんな授業があふれていないか、見回してみてください。

今回、実践研のレポート作成に当たり、文芸研の教材分析・解釈のおもしろさを改めて感じた方もおられたのではないでしようか。

教師自身がまず教材をしっかりと学び、その魅力を感じることなしに、いい授業はできません。そこからしか始まらないのです。実践研で大いに学び合いましょう。



全国大会を振り返って

オンラインだからこそ・・・

千葉文芸研 沼澤賢

【大会前】

20..44

「只今代表者会議中。ご相談です。全体会の司会を沼澤さんという声があります。もし、受けていただけののなら適任と思いますがいかがでしょうか？」

曾根成子

「適任」ということはどういうことだろう？自問自答しました。曾根先生からみると「適任」かも知れませんが、自分からみると「適任でない」ということはわかっています。なので、曾根先生からみた「適任」の具体を自分なりにもうもう少し考え、次の考えが浮かんできました。

「関東圏に住んでいる。」「文芸会員である。」「おそらく断らないだろう。」・・・

でも、ほとんど同時に次のような気持ちもわきあがってきました。それは、きっと子どもが先生に抱

く気持ちと似ていることと思います。

「憧れの先生から声をかけられて嬉しい。」「こんな機会またとない。」「自分も全国大会に役立てるかも。」

そんなことを考えていました。そして、「いかがでしょうか。」という問いに対しては、もちろん断る理由は、あろうはずがありません。むしろ、理由ではなく、体が断ることを拒否したといつてよいでしょう。

もちろん返信は、「お願いします。」と送りました。

―その間約2分

後悔は文字通り後からやってくるもので、「大丈夫かな。」「できるかな。」と不安が募りはじめました。なにせ、文芸研の運動の中心である全国大会の司会をやるのですから。失敗は許されません。

尻込みする自分が「もし、他の人が推薦されれば、そちらの方に喜んで譲ります。」と返信文を考えはじめました。ひとまず文が完成し、メッセージの体裁を整えようしている時です。すぐには、承認されないだろう思いながら・・・

携帯から少し離れ（2分間ほど）、「よし、送信し

よう。」と思っていると新着メッセージがありました。「みなさん承認してくださったので、お願いします。」（はやっ！）

—もうやるしかない・・・。

「適任」の理由を自分なりに《選択》しました。「みなさんから期待されている。」「役立てる。」きっとそう思っているだろうと前向きに捉え、大会まで開催の準備を進めていきました。

【現地入り】

大会本部は、横浜市にある精華小学校です。昨年度もお世話になりました。今回も快く本部として場所を提供してくださいました。本当にありがとうございます。

当日の横浜の天気は晴れ。体感気温は40度。本部に着く頃には汗だくでした。横浜特有の潮の香りが混じった「浜風」に吹かれると、よりいっそう体はべたつきます。緊張という気持ちもちろん、自分の体に張り付いたままです。でも、どこか安心する自分もありました。それは本部運営をしているベテランの先生方がいたからに、他なりません。

本部に到着したのは、11...00でした。開始まで時間は2時間です。入室が12...30なのであまり余裕はありませんでした。まずは、パソコンの準備

です。普段行うズームと違って一つの部屋に複数台のパソコンを使用します。実際やってみると大変だったのが、ハウリング問題です。複数台のパソコンを近くに置くと、互いに音を拾い合ってしまう、「キーン」と音が響いてしまいます。映像と音が主流ですから、ちよつとでもハウリングしてしまうと参加者に対してとても迷惑であり、せっかく楽しみにしていた気持ちもなえてしまいます。何よりも、そんな不手際を出すことは許されません。ですから、準備の中でもそのところの解決に一番時間をさきました。みななどで知恵を出し合いながらベストに近づけるようにしていきました。機械的なことがクリアされれば、あとは、「流れ」の確認です。といっても、人の出入りだけでなく、スライドをどこで写すのか、どのタイミング話をするのかなど、対面とはまた違った小さな課題も出てきました。しかし、繰り返し確認をし、練習することで、解決することができました。言葉には出なかったものの、「これでいい。」と感じることができました。

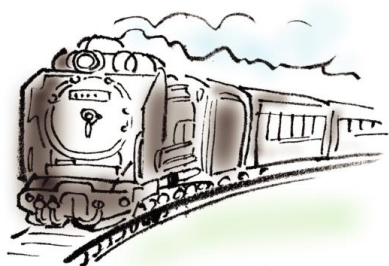
始まってしまえば、あとの様子は、みなさんが視聴したとおりです。

出だしでハウリングしてまうなど、いろいろありましたが、みなさんの協力のもと無事に終えること

ができました。

【最後に】

今回、司会という形で関わらせていただき、また一つ自分自身成長のきっかけをつかむことができました。それは、たくさんの先生方の励ましなどがあったからです。自分は、たまたま、司会というパズルの最後のピースをはめるような役をいただきました。全国大会全体会という大きなパズルの完成には、様々なピースが必要です。その中には、決して描かれていない、いわば余白を埋めたり、柄と柄をつなげる無地のピースもあります。描かれていないピースは、全体を見た時に、その存在がなかなか認識されません。しかし、今回自分は、描かれていないピースの存在が鮮やかに認識にできると共に、描かれていないと思ったピースの重要性に気付くことができました。そして、何よりも大きなトラブルなく終えることができたことに、ほんとうに嬉しく思います。次回の山口大会もがんばりたいと思います。



文芸研写真館



大会終了後のカフェにて
吾郎先生のオフショット、
これが最初で最後か。

サークル便り その一

かごしま文芸研 ニュース

かごしま文芸研 堀ゆかり

おやつとさあ！かごしま文芸研です。かごしま文芸研は月1回のペースでサークルをしています。最近では来年の山口大会で提案する「走れメロス」を中心に学習をしています。レポートは数名で分担し、お互いの考えを共有しながらひとまとまりのレポートを作成しています。困難に苦悩しながら乗り越え

ようとするメロスと中学生を重ねながら読んでいます。サークル員も同じようにレポートの産みの苦しみをどう乗り越えようかと奮闘しているところです。

今回は8月8日に「かごしま文芸研 夏の教材研究会」

について紹介したいと思います。午前は、鹿児島国際大学の千々岩弘一先生に『実感』としての文芸教育の必要性』についてお話をいただきました。内容は、



- (1) 「個人情報」「自己の楽しみ」を公開する短絡的な自己顕示欲・過剰なナルシズムが蔓延
- (2) 「匿名の世界」に逃げ込む「無責任の助長」
- (3) 結果や影響を想像できず、一方的な物言いをする「自律性の弱体化」

- (4) 「現象の表層」しか見ず「現象の深層」を見ようとしなない。想像力・洞察力の衰退

- (5) 関係性構築の忌避 など

現在の問題点をあげられ、この「危機」を忌避するためには、文芸作品に「読み浸る」体験を通して、「自己との切実な対峙」「他者との切実な対峙（読みの交流）」「作者の認識（価値観）」を保障する文芸の

授業の工夫が重要であると断言されました。私たちサークル員もこのお話を聞いて元気をもらいました。

午後は、低・中・高学年・中学と4つの分散会で教材分析を行いました。参加者からは、「共同体験をいかにさせることができるかで、この教材の価値を高められ、子どもたちの読書を豊かなものにできるかわかりました。題名もさらりと通ってしまいましたが、どれだけ子どもたちの興味を引き出せることができるか考えることができました。」「教材研究は本当に面白かったです。恥ずかしながら初めて視点という言葉を知り、発問がなぜかばやつとしていた理由がわかりました。こんな授業なら子どもたちも楽しいと思います。言葉の一つ一つを大切にしたい授業にチャレンジしたいと思います。」「夏休みに教材研究を一人でしたくなくて、文芸研のみなさんと教材研究したら間違いないと思って参加しました。参加してよかったです。なぜ『文芸』なのか、作品を通して子どもたちに何を伝えたいのか、今日の話し合いの中で自分の心に持つことができましたので、もう一度自分で教材研究をしながら準備をしつかりして子どもたちに向き合いたいです。また次もお願います。」「などの感想をいただきました。また、青年部の学習会や力量研でも「文芸研の学習を」と要請されたときは、サークル員が県内のどこにでも出かけ、共に学ぶ活動をしています。

サークル便り その二

自慢してええんちゃう？

うちのサークル

枚方サークル 野澤智子

「できるとこまでやりましょう。」

「期限が迫ってるしね。」

山中尊生さんの言葉にみんなにつこりうなずいています。

10月の土曜の深夜。8時から始まったサークル会議はもう3時間以上たっています。

枚方サークルは今年に引き続き来年の全国大会でも「海の命」の分科会提案をすることになりました。

今年の大会に向けては、ずいぶん前の枚方集会での花岡実践をリメイク？する形で発表することになりました。辻さんたちからも助言いただき、オンラインサークルを繰り返し、なんとか大会に間に合ったのでした。「何とか終わったあ〜」と、ほっとしていたのもつかの間、今度は浅海さんがレポーターとのこと。浅海さんといえば「わらぐつの中の神様」の最後のレポーターです。その後サークルには冬眠状態でした。それでも引き受けてくれ、夏休みの間に

教材解釈を作成したではありませんか！いつでもお尻に火がつかないと取り組めない私としては驚異に値するものです。しかも、自分一人で考えて作成！わお！その上、枚方は東京書籍のため、2学期中に実践をしなければならず、(学級数が多く3学期に回すことができませんでした。)教材解釈を10月には完成し、役員の方々に見てもらってから12月には実践するということになりました。

それから枚方サークルの奮闘？が始まりました。

毎週のようにLINEにあがるレポートをオンラインで検討です。携帯やPCでの画面では見にくいシニア連中は検討するたびに訂正してあがってくるファイルをプリントアウトしての参加です。「これ、前のやつやん！」「え？それ何ページ？」なんて言いながらもなんとか会議に参加。起きているのか寝ているのかわからない北村さんと野澤正美も、時々覚醒して意見を言い(笑)。PC画面では今のレポートと前回のレポートを比較して提示してくれる達人。なんとかみんなの力を集結しての会議です。

なかなか対面での会議はできなくても、オンラインという条件を生かせば、時間を気にすることなく(いやいや、気にせなあかんやろ！)話し合えます。時々出てくるボケやツツコミを楽しみながらやっています。これも、今までの長い年月の積み重ねが

事務局通信

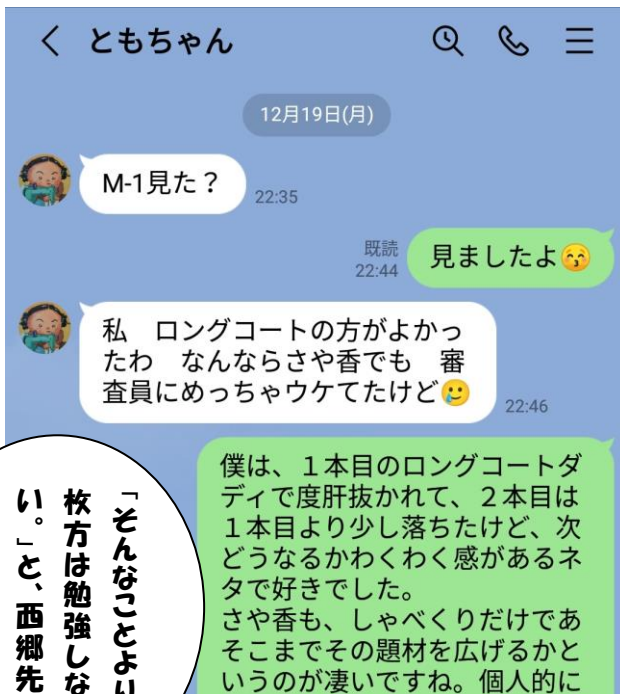
大雪警報も出るなど、天候も心配ですが、長い二学期も終わり、対面での冬の実践研を開催することができます。ここ3年オンラインでの会議や実践研も多かったですが、やはり対面での開催は嬉しいものがあります。オンラインの良さは時間と場所を乗り越えることが出来ますが、対面だからこそできることがたくさんあります。

最近読んだ『オンライン脳』川島隆太著 アスコム社でも「人びとは、いま日本に蔓延するオンラインコミュニケーションのリスクに、あまりにも無自覚で、その悪影響を軽視しすぎている。」「オンラインでは、コミュニケーションになっていない」のです。情報は伝達できるが、感情は「共感」していません。つまり、相手と心がつながっていない、ということの意味します。」オンラインでできることとリスクも理解した上で、今回対面での実践研を実施できることを嬉しく思います。

冬の実践研は、来年の大会レポートの検討と理論学習の場でもあります。皆さんの参加で成り立っていきます。今回、レポーターの皆様事前のレポート作成ありがとうございました。また、各サークルでもお忙しい中、レポートの検討ありがとうございます。

あつたればこそそのことです。最近サークルに入ってくれた神牧さんとは、まだ、ナマで会ったことがないので、早くナマ神牧を体験？したいものです。こんなアホなことを言っている私のもとに、浅海さんの実践記録の途中経過がLINEで送られてきました。印刷してトリトリしていたころのことを思うと、文明の進化の速さに驚いてしまいます。あの頃の苦労はなんやったんや〜！！

ついでに、この時期恒例のやりとりです。



「そんなことより、枚方は勉強しなさい。」と、西郷先生に叱られそう。

す。私たちが、誰よりも豊かに深く学び、自身を持って全国の悩める先生方に文芸理論と文芸理論に基づく実践や子どもたちの変容を伝え、文芸研の運動がより熱く広がりを見せるものとなるように力を合わせていきたいと思います。

文芸研の運動を進めていく上でも、今回の冬の実践研が実り多いものになるように、皆様のご参加ご協力よろしく願います。今回は、サークル代表者会議をオンラインでもつなぐことを試していきます。どうしても対面では、ご参加できない皆様も是非ご協力ください。皆様に会えるのを楽しみにしております。

★文芸教育、授業シリーズについての呼びかけ・販売をお願いします。学習会が組織しにくい中ですが、サークルでの学習や学校の同僚への紹介など、工夫して広げていきましょう。「実践研いったつもりで文芸教育誌」「職場の机上に文芸教育誌を置いておく」など様々な方の工夫もお聞きしています。

国語の教室を実施する際は、必ず紹介する。文芸教育誌に興味をもち、書店に問い合わせてもらったり、新読書社に連絡してもらえ方がいるなら、是非一言声掛けていきましょう。私たちの一歩が、一声が運動の柱です。皆様よろしく願います。

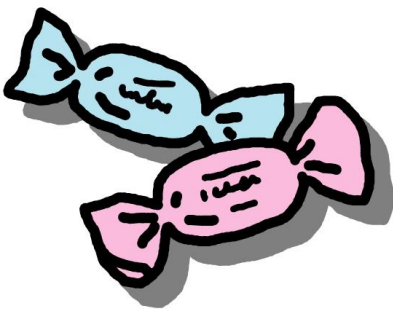
★サークル会費納入お願い。まだお済みでないサークルは振り込みでの納入をお願いします。ご協力よろしく願います。

今後の予定

（予定が詳しく決まりましたら、随時連絡します。）

6月3日（土）4日（日） 春の実践研（サークル代表者会議で確認）

7月29日（土）30日（日） 全国大会



【事務局員の妄想日記】ある日の学級通信より

昨日、香里園方面に出張で出ていました。その帰り。もう辺りは暗い。寒い。自然と、足が自販機へと進みました。

どれにしようかなと目をあちこちさせていた時、私はあることに気が付きました。この写真がそれをよく表しています。それに気付いた私は、心の中に何かもやもやしたものが生まれました。

さて、この自販機の写真。私は何に気が付き、何にもやもやしたのでしょうか。



自販機の「あったか〜い」ばかりを見ていたところ、冷たい方に目を移してみると、おやっ。冷たい方は、「つめた〜い」となっています。何か感じませんか。その時の私は、この「つめた〜い」に、ある

違和感を覚えたのです。

まず、ホットドリンクは温かさをより感じるために、「あたたかい」でも「あったかい」でもなく、「あったか〜い」と表されているのだと思います。そうになると、冷たいドリンクは「つめたい」としたいところ。しかし、「つめた〜い」となっているではありませんか。「つめた〜い」でいくと、「つめたい」よりどうしてもあたたかくなってしまいませんか。「〜」があると、その言葉を口にしてている人の温かさが、にわかにですが入ってしまっているような気がしてしまうのです。

ドリンクの冷たさを表したいはずなのに、なぜ自販機に「つめた〜い」としたのだろうと。そのもやもやが、自分の心にあることに気が付きました。

ホットが「あったか〜い」だから、それに合わせて冷たい方も「つめた〜い」としているのか。それじゃあ、しっかりと冷たさが伝わらないじゃないか。「つめたい」とか「冷たい」「冷」「コールド」などの方が、より冷えた感じがするはず。冷たさに自信がないのか？ いや、ガタンと出てきたドリンクを取り出したら夏なら気持ちいいぐらいに冷えています。

おそらくですが、「あったか〜い」に合わせて「つめた〜い」としている。ただ、それだけなのかもしれ

れません。でも、そんな結末、おもしろくない。無理やりにも「つめたい」に何か意味はないか、役に立つのか立たないのか分からないこの妄想力で考えてみたいのです。

「つめたい」は、ドリンクの冷たさだけではなく、他の何かを表していると考え、それは何なのか。それは、そのドリンクを売っている会社、人のあたかさ、あったかみのようなものなのかもしれない。もし「つめたい」だと、ドリンクだけではなく、買う人の心も冷やしてしまうような、そんな気がします。

「こちらへどうぞ。こちらのドリンク、冷えていますよ。どうぞです。」

という声が、「つめたい」からはしないけど、「つめたい」から聞こえては来ないでしょうか。 (完)